体育　５年１組「体ほぐしの運動」「体の動きを高める運動」授業者　加藤　享

今日の自分にぴったりの動きを見付けるために試行錯誤することを通して、工夫した行い方を共有する体育科の学習

目指す子供の具体的な姿	
問いやこだわりをもって学ぶ子供の姿	・自分やグループにぴったりの動き（最適解）を見付けるために、動きを試したり話し合ったりするなど試行錯誤する姿 ・「この距離だと簡単すぎる」「もっとテンポを速くしたい」などという個別の切実な思い（こだわり）をもち、与えられた条件をそのままこなすのではなく、「用具をこっちに変えてみたらどうかな？」「違うルールにしたらもっと面白くなるのではないか」という新たな問いをもって、自分の体力や課題に合った条件を試そうとしている姿
仲間と対話し、考えを広げ深めながら価値を共に創り出す姿	・自分たちに合った動きを見付けるための試行錯誤を通して、「距離やリズムなどの条件を変えることが心地良い動きにつながる」ことや、「仲間の動きのよさを取り入れるとさらに運動が楽しくなる」ことに気付き、その発見を動作や言葉で仲間にシェア（伝達）したりカード記述したりしている姿
学びを通して自己を変容させ、自らの可能性を広げていく子供の姿（単元レベル）	・体を動かす根源的な心地よさや、自己の動きの最適解を見付ける面白さを仲間と共有し、技能の優劣を超えて全員が楽しめる運動をつくる喜びを実感する中で、身体リテラシーを高め、他者との比較にとらわれない豊かなスポーツライフを自ら拓いていく姿

【成果】

○【問い・こだわりをもって学びに向かう姿】

豊富な用具や工夫された場に触発され、「もっとやりたい」「今の自分にぴったり」な動きを見つけようと、子供たちが没頭・熱中して試行錯誤する姿が見られました。

○【共同体での共有・対話を通した広がり】

普段の学級経営を基盤としたグループ活動の中で、仲間と協働して動きを創り出したり、試行錯誤の理由を説明し合ったりする姿が見られ、動きの工夫を共有する学びとなっていました。

○【その姿を支えた単元構成・教師の関わり】

子供が自然と動き出したくなる魅力的な環境（豊富な用具）の設定や、活動中に子供の思いの言語化を促す教師の問い返しが、没頭や自己変容を引き出していたと考えられます。

【課題】

●【教科の見方・考え方へのつながり】

動きの多様化が見られた一方で、「力強い動き」などのねらいとのつながりが見えにくい動きもあり、こだわりが十分に教科らしい学びへとつながっていたかは、今後も検討が必要です。

●【自己変容・価値の自覚の弱さ】

「楽しかった」という実感はもてたものの、自らの動きが「前より高まった」という自己変容や、「自分にぴったりの運動を見つけた」といった学びの価値を自覚するには至りにくかった可能性があります。

●【単元構成・教師の関わりの改善点】

「ぴったりな運動を見つける（選択・調整）」ことと「他者に伝える」ことなど、本時の学習課題が混在し、子供の視点がぼやけてしまった可能性があります。また、活動前に自分の心と体の状態を把握する場面が不足し、運動を自己調整する基盤が弱くなっていたと考えられます。

【次につながる仮説】

□活動場面で、教師が「力強い動き」や「巧みな動き」といった教科の見方・考え方に沿って問い返しや価値付けを行えば、子供のこだわりが個人的な楽しさにとどまらず、教科の本質的な学びへと向かうのではないか。

□仲間と共有する場面に「自分はこう調整した」「これで動きが高まった」という視点を位置付ければ、子供たちは仲間の考えを通して自らの運動を見直し、再構成していくのではないか。

北海道教育大学附属旭川小学校 教育研究大会2026 実践報告

理科　４年２組「電流のはたらき」授業者　内潟 琢志

素朴な概念を仲間とともに見直し 電気の世界への見方を広げていく学習

目指す子供の具体的な姿	
問いやこだわりをもって学ぶ子供の姿	検流計の数値を根拠に自分のこだわりある見方と比べながら、つなぎ方と電流の関係を自分なりに表現する姿。また、モデル図を描く中で「並列の矢印はどの太さが正しいか」等を考えながら、自分の考えを見直そうとする姿。
仲間と対話し、考えを広げ深めながら価値を共に創り出す姿	モデル図を仲間と見せ合いながら「自分はこう描いたけどどう？」と問い掛け、異なる表現から自分の考えを見直している姿。また、実験結果を他班の結果と比べ「どの班も同じ結果だから確かだ」という根拠を基に考えをつくり出す姿。
学びを通して自己を変容させ、自らの可能性を広げていく子供の姿（単元レベル）	電流の流れ方やつなぎ方についての素朴な概念が「電気は消費されず循環するように流れる」「つなぎ方によって電流の大きさが変わる」という関係的な理解へと見直されていく。さらに実験結果を受けて次の問いへ向かい、電流の見方で身近な家電をみながら自らの世界を広げていこうとする姿。

【成果】

○【素朴な見方の表出】

事前調査で捉えられた「電池を増やせば速くなる・長持ちする」という素朴な見方を、子供が矢印モデルを用いて表出する姿が見られました。

○【対立する予想の生成】

直列つなぎで速く走る理由をめぐり、「導線の長さ」説と「電流の大きさ」説という、対立する二つの予想（こだわり）が子供から生まれました。

○【結果のばらつきを問い直す姿】

実験結果が学級全体で大きくばらついた際、「このままでは結論を出せない」「電池がきちんとセットされていなかったのではないか」という声が上がりました。同じ条件の実験を複数の班で行い、結果を照らし合わせられる計画が、結果を鵜呑みにせず、その信頼性を確かめようとする姿につながったと考えられます。

【課題】

●【対立する予想を検証する実験計画】

同じ条件の実験を複数の班で行ったことで、結果のばらつきに気付くことはできましたが、「導線の長さ」説と「電流の大きさ」説を比較・検証する場にはなりませんでした。子供から生まれた予想を基に、調べる条件を吟味する場が必要です。

●【実験技能と結果の信頼性】

回路を組むことや検流計を組み込むこと、電池と導線の接触を確かめることに難しさがあり、結果が大きくばらつきました。その確認に時間を要し、本時のねらいであった「つなぎ方と電流の大きさの関係を仲間と見直す」ことに十分迫れませんでした。

●【結果の見通しの具体化】

「この説が正しければ、どのような結果になるはずか」という見通しが十分に具体化されていませんでした。そのため、予想との食い違いが実験技能によるものか、自分の考えの妥当性に関わるものかを判断しにくかった可能性があります。

【次につながる仮説】

□結果や考えが一致しない場面で、原因の確認にとどめず、互いの根拠を出し合う対話の場を設ければ、子供のこだわりは検証や見直しへとつながるのではないか。

□実験技能を確かにする段階では同じ条件の結果を照らし合わせ、その後、対立する予想に基づいて条件を変える実験へ移行すれば、信頼性を吟味しながら探究を深められるのではないか。

□予想の段階で期待される結果を具体的に言語化し、結果とのずれを問い返せば、子供は実験方法と自分の考えの両面から検討できるのではないか。

北海道教育大学附属旭川小学校 教育研究大会2026 実践報告

国語　１年２組「本と仲良し」授業者　小玉 光朗

「選書」を通して自己を拓き、友達との「推薦」を通じて、こだわりを更新し続ける「読書単元」の学習

目指す子供の具体的な姿	
問いやこだわりをもって学ぶ子供の姿	自分のブックトークに入れる本を選ぶことで、自分はどんな本が好きかに気付くことを契機に、自己のこだわりを明らかにする。また、友達との交流を経て選書を更新することを通じて、自己のこだわりを深化、更新し続ける姿。
仲間と対話し、考えを広げ深めながら価値を共に創り出す姿	自分の本を紹介し合う活動を通じて、様々な本があることを知り、「どの本を入れ替えるか」と問い続ける姿。また、選書の更新やテーマ、共通点の変化を通して、自らの好みが変わったり、深まったりすることに学びの価値を見いだす姿。
学びを通して自己を変容させ、自らの可能性を広げていく子供の姿（単元レベル）	限定されたブックトークに入れる本の選書を通して、自らの好みを明らかにすると共に、友人との交流を通じて、選書の中身が入れ替わったり、トークのテーマが変化したりする過程を振り返ることで、本には様々な種類があることを知り、読書の幅を広げるような自立した読者を目指す姿。

【成果】

○【こだわりの発揮と主体的な学び】

「３冊限定」という条件の中で好きな本を選び抜く活動を通して、子供たちが自分なりのこだわりを発揮し、読書を自分事として捉えて学ぶ姿が見られました。また、自ら読書ノートを作って書き始めるなど、与えられた枠を超えて学びを拓こうとする姿も表れていました。

○【仲間との共有・対話】

「ライブ推薦」では、選んだ本のお気に入りのページを直接見せながら、本の面白さを伝えようとする姿が見られました。

○【姿を支えた単元構成と教師の関わり】

「３冊限定」という条件や、文字を書く負担を減らした「ライブ推薦」が、子供の直感的な興味を肯定し、こだわりを表出する足場として有効に機能していたと考えられます。

【課題】

●【対話の深まりと教科の見方・考え方】

本の魅力を言葉で伝え合うことがねらいでしたが、「交換しよう」「バイバイ」といった本の貸し借りに交流が移る場面もあり、言葉で本の魅力を伝える学びに十分向かわなかった可能性があります。

●【「聞く側」の関わりと再構成】

「伝える側」への意識付けは機能したものの、「聞く側」がどのように反応し、問い返すかという視点が不足していました。そのため、対話が一方向になり、互いの考えを見直したり再構成したりするところまで深まりにくかったと考えられます。

●【自己変容の自覚の難しさ】

３冊の共通点を見いだして本棚に名前を付ける活動は、１年生にとって抽象度が高く、戸惑う子供も見られました。学びの価値や自己の変容を自覚できるよう、具体的なお気に入りポイントから共通点へと段階的に考える必要があります。

【次につながる仮説】

□「聞く側」の相づちや問い返しのモデルをミニレッスンで位置付ければ、対話が双方向になり、互いの本の見方を広げられるのではないか。

□「この本のここが好き」という具体的なお気に入りポイントを蓄積し、カンファレンスで共通点を言語化すれば、子供は無理なく本棚の名前を考え、学びの意味を自覚できるのではないか。

□交流の目的を「言葉で本の魅力を伝えること」と明確にし、その視点で振り返れば、活動の楽しさが言葉の働きに気付く学びへとつながるのではないか。

家庭科　５年２組「ソーイング　はじめの一歩」授業者　石津 光輝

宿泊体験学習での生活場面を見つめ、自分のこだわりと目的を結び付けながら、仲間との対話を通してよりよい製作へと更新する家庭科の学習

目指す子供の具体的な姿	
問いやこだわりをもって学ぶ子供の姿	作りたい物や目的と現状の製作物とのずれから問いを見いだし、「せっかく使うならこれからも使えるようにしたい」「小物が隙間から落ちないようにしたい」と、自分の課題から適した解決方法を意図をもって選択し、より良い製作物を作り上げようとする姿。
仲間と対話し、考えを広げ深めながら価値を共に創り出す姿	仲間との対話を通して、「ここを返し縫いにすると丈夫になるよ」「この縫い方だと、こんな問題が発生しそうじゃない？」と、互いに意見を出し合いながら、よりよいものを共に作り出そうとする姿。
学びを通して自己を変容させ、自らの可能性を広げていく子供の姿（単元レベル）	自分の理想や目的と現状のずれから問いを見いだし、他者との対話を通して獲得した様々な視点や価値を基に、自らの問いを見つめ直し改善につなげる姿。「またやりたい」「ミシンを使った製作も楽しみ」と、達成感や満足感を感じ、生活を自分事として捉え、生かそうとする姿。

【成果】

○**【生活に即した問いの生成】**
当初は「自分の好きなデザインにしたい」というこだわりが先行していましたが、試し作りや他者との対話を通して、「実際に使えるのか」という問いを見いだす姿が見られました。

○**【見方・考え方を働かせた計画の見直し】**
壊れた作品例（Badモデル）を観察し、見た目だけでなく、「丈夫さ」や「出し入れのしやすさ」といった視点から、自分の計画を見直す必要性に気付いていました。

○**【技能と時間を踏まえた意思決定】**
自分の得意・苦手を表す「得意メーター」と製作時間の制約を照らし合わせ、現実的な計画へ修正する姿が見られました。

○**【環境構成の有効性】**
縫い方の条件を変えた作品例が、縫い目の細かさも丈夫さを左右する要因であることに、子供が自ら気付く環境として有効でした。

【課題】

●**【対話による見直し】**
自分の考えが固まっている子供の中には、他者の助言を単なる「紹介」として受け流し、自らの方法を見直すまでには至らない姿も見られました。比較や再検討を促す教師の関わりを工夫する必要があります。

●**【待つことと仕掛けることのバランス】**
資料提示のタイミングや教師の問いかけについて、子供が自然に課題に気付くのを待つ場面と、意図的に問いを生み出す場面とのバランスを検討する必要があります。

●**【自己評価と実際の技能との接続】**
「得意メーター」で技能を捉えていても、それが実際の製作時間や仕上がりにどう影響するかまでは十分に捉えられていませんでした。自己評価を具体的な事実と結び付ける必要があります。

●**【使用場面の具体化】**
作品例だけでなく、実際に中に入れる物も用意していれば、使い方に応じて、どこを丈夫にする必要があるかをより具体的に考えられた可能性があります。

【次につながる仮説】

□試し作りや実物に触れられる環境を整えれば、子供は生活に即した活動の中でこだわりを発揮し、仲間との関わりを通して自らの学びを拓くのではないか。
□「練習にかかった時間」と「得意メーター」を照らし合わせて製作計画を検討すれば、子供は技能の現状を客観的に捉え、条件に応じた意思決定をしやすくなるのではないか。
□実際に中に入れる物を用いて試す場を設ければ、使う人や用途を意識し、丈夫さや使いやすさの視点から計画を見直すのではないか。

外国語　３年１組「『What do you like?』 Let's try! 1 Unit５」授業者　齋藤 梓伸

相手の好きなものをインタビューして分かったことを基に
真似る、なりきることを通して、好きな（苦手な）ものやことを伝える学習

目指す子供の具体的な姿	
問いやこだわりをもって学ぶ子供の姿	自分の伝えたい思いを起点に、自分の好きなものや苦手なものについて多様な相手に伝わる表現のこだわりを見いだすために、「相手はどんな思いや考えをもっているかな？」と考えながら聞いたり、「どんな表現を使えば、相手に自分の思いや考え、こだわりが伝わるかな？」と考えたりして、表現内容及び表現方法を試行錯誤する姿
仲間と対話し、考えを広げ深めながら価値を共に創り出す姿	同じグループ及び同じ好きなものや苦手なものがある友達、異なるグループ及び異なる思いや考えをもつ友達などの多様な相手と、好きなものや苦手なものについて交流及び相互評価を通して、「自分が本当に伝えたい思いや考えってこれかもしれないな。」と感じるなど、こだわりの表現内容及び表現方法を見いだす姿
学びを通して自己を変容させ、自らの可能性を広げていく子供の姿（単元レベル）	友達の好きなものや苦手なものを聞いて、「同じものやことが好きで嬉しいな。」という共通性や「好きな理由は他にもそんなところがあるのか。」「自分が苦手なものが好きな人もいるのか。」という相違点から「いろいろな考えの人がいて面白いな」という多様性を感じ、コミュニケーションの楽しさや表現する喜びを味わう姿

【成果】

○**【問い・こだわりをもって学びに向かう姿】**
自分の「好き」の度合いを伝えるために、既習の "I like" だけでなく、"I love" や "My favorite" といった表現を選び、こだわりをもって使い分ける姿が見られました。

○**【教科の見方・考え方とのつながり】**
単語を並べるだけでなく、ジェスチャーや声の大きさ、話す順番を工夫し、相手への伝わり方を意識する姿が見られました。

○**【仲間との対話による再構成】**
仲間との対話を通して、"Do you like …?" を使って予想を確かめる方法を取り入れ、やり取りを続けようとする姿が見られました。

○**【自己の変容の自覚と次時への見通し】**
「次はジェスチャーをもっと工夫したい」「"Do you like …?" を使って確かめたい」など、次時に向けた具体的な目標を語る子供が見られました。

【課題】

●**【活動の楽しさと言語の学びとの接続】**
「なりきる」楽しさやゲームの盛り上がりが先行し、相手に配慮しながら伝え方を工夫する学びに十分つながらない姿も見られました。

●**【習熟度に応じた問いの設定】**
習熟度の高い子供は通常のやり取りを容易に終え、表現をさらに吟味する問いが生まれにくい状況が見られました。

●**【対話の質と再構成の深まり】**
対話がクイズの正解探しに集中し、相手の思いや意図を確かめながら応答するやり取りにまでは十分至りませんでした。

●**【単元構成と振り返り】**
一部の子供は表現の変化を言語化できましたが、学級全体では、インタビューで得た情報を自分の表現として再構成する中間活動や、次のこだわりにつながる振り返りが不足していた可能性があります。

【次につながる仮説】

□「なりきり」という言語活動を設定すれば、子供は他者の表現を取り入れ、使える表現の幅を広げるのではないか。
□聞き取った情報を相手になりきって紹介する中間活動を位置付ければ、情報を自分の表現として再構成し、その後のやり取りを豊かにできるのではないか。
□「誰に、何のために、どの場面で伝えるのか」を教師が問い返せば、活動の楽しさが、目的や場面に応じて表現を工夫する学びへとつながるのではないか。

生活　１年１組「きれいに さいてね わたしの はな」授業者　田中 俊光

発芽した様子を伝え合い、自分のこだわりをもって世話の仕方を見直す学習

目指す子供の具体的な姿	
問いやこだわりをもって学ぶ子供の姿	これまでお世話を続けてきた○○ちゃんにとって、間引きが必要か不必要かを伝え合う活動から、「もっと成長するためには間引きは必要なのだろうか？」「間引きすると、育てた○○ちゃんとお別れになっちゃうのかな？」と問いをもちながら、友達と考えを伝え合い、対象と自分との関わり方を改めて考えている姿。
仲間と対話し、考えを広げ深めながら価値を共に創り出す姿	間引きすることの意味を理解した上で、間引きする派と間引きできない派の両方の考え方に触れることで、どちらの選択をするほうが、より○○ちゃんのためになるのかを考えている姿。
学びを通して自己を変容させ、自らの可能性を広げていく子供の姿（単元レベル）	植物を育てる活動を継続的に行うことで、「お世話は大変だったけど、きれいな花が咲いてよかった」「みんなの花もきれいだけど、一番好きなのは自分の花だな」と、植物に関心を向け、育てている植物に合った世話の仕方を考え実行し、○○ちゃんが自分と同じように生命をもっていることや日々成長していることに気付き、植物を大好きに大切にしようとする姿。

【成果】

○【対象への思いや願いを起点とした学び】
単元の始めに、アサガオを含む７種類の種から育てたい植物を自ら選んだことで、思いや願いをもち、継続して世話をする姿が見られました。

○【経験と対話に基づく自己決定】
間引きをするかどうかを選ぶ場面では、これまでの世話の経験や仲間との対話を基に、植物との関わり方を真剣に考える姿が見られました。

○【愛着と主体性を支える環境】
植物に名前を付けたり、成長を願う表現活動を取り入れたりしたことで愛着が育まれ、観察・振り返り・見通しなど、自分で決めた活動から学びを始める姿につながりました。

○【比較を通した気付きの広がり】
７種類の植物を継続して育てることで、種や芽などの成長の節目に友達の植物との違いを比較しながら観察する姿が見られました。

【課題】

●【情意的な気付きの表出】
間引きをするかどうかを選ぶ場面では、育ち方に関する発言が多く、植物への思いや願いを言葉や動作で表す姿は十分に見取れませんでした。生活科らしい情意的な気付きを表出できる環境が必要です。

●【自己決定に至る過程の共有】
自己選択はできていましたが、決定に至るまでの思いや願いを共有する場において、情意面を引き出す問い返しや板書の工夫を検討する必要があります。

●【自己の変容の自覚】
自分が植物にどのように関わってきたかを振り返り、成長や変容を実感できるよう、写真や記録を継続的に見返せる環境が必要です。

●【見取りの具体性】
子供が植物に繰り返し働きかけ、気付きの質を高めた姿を、具体的な言動や記録に基づいて示す必要がありました。

【次につながる仮説】

□写真や成長記録などを手がかりに、植物への思いや願いを言葉や動作で表せる環境を整えれば、子供は対象へのこだわりを発揮し、自己決定の理由を深めるのではないか。
□全体交流で、それぞれが育てる植物の変化や困り事を比べる場を設ければ、子供は自分と植物との関わりを捉え直し、気付きの質を高めるのではないか。
□これまでの写真や記録を見返して関わりの変化を振り返れば、子供は植物と共に成長した自分の変容を自覚しやすくなるのではないか。

特別活動　６年２組「最高の修学旅行をみんなでつくりだすには」授業者　福西 晟歩

最高の修学旅行を仲間と共に実現するために課題を見いだすことを通して、自分の「なりたい・在りたい」を意思決定する学習

目指す子供の具体的な姿	
問いやこだわりをもって学ぶ子供の姿	・学級の課題から、それと結び付く自身の課題を見いだし、解決するために自分にできることを想像しながら、良い影響をもたらそうと考えを巡らせる姿
仲間と対話し、考えを広げ深めながら価値を共に創り出す姿	・類似するカテゴリーの課題を選択した仲間との対話を通して、「みんなで最高の修学旅行にする」ために、よりよい方法や目標を導き出す姿
学びを通して自己を変容させ、自らの可能性を広げていく子供の姿（単元レベル）	・「なりたい・在りたい」を更新する中で、集団における自己有用感や所属感を実感しながら、「自分にはこんなことができるはずだ」と前向きに行動しようとする姿

【成果】

○**【問いやこだわりをもって学びに向かう姿】**
修学旅行を前に、子供たちは「マナーを守る」「時間を見通す」といったこだわりをもちました。自分たちの楽しさが周囲の人への迷惑に変わる可能性に気付き、公共の場でどのように振る舞うかを自分事として考える姿が見られました。

○**【特別活動の特質と結び付いたこだわり】**
国語科のパネルディスカッションと関連付けたことで、多角的な視点から意見を整理し、合意形成を図る学びが、生活上の課題を解決する手立てとして働きました。

○**【仲間との対話を通した再構成】**
対話を通して、個人的な「楽しみたい」という思いが、「みんなにとって最高の修学旅行にするには」という共通の願いへと広がりました。時間の遅れを個人の失敗ではなく、集団全体や周囲に関わる課題として捉え直す姿も見られました。

○**【学びの価値と自己変容の兆し】**
「自分ノート」や「キャリア・パスポート」を活用し、日常の自分と修学旅行での「なりたい・在りたい姿」をつなげ、具体的な行動目標を考える姿が見られました。

○**【姿を支えた単元構成と教師の関わり】**
総合的な学習の時間・国語科・特別活動を関連付けたことで、自分の課題と向き合う時間が生まれました。また、「それって誰のため？」「誰がHAPPYなの？」という問い返しが、子供の視点を自分から他者や社会へ広げる支援となりました。

【課題】

●**【対話による考えの再構成】**
対話を通して視点を広げる姿が見られた一方で、一部の子供は相手の意見を受けて自分の考えを再構成するまでには至らず、自己完結的に意思決定を終える姿も見られました。

●**【学びの意味や変容の自覚】**
修学旅行を「通過点」として捉え、そこでの学びをその後の日常生活にどのようにつなげるかについては、実践後の振り返りをさらに工夫する必要があります。

【次につながる仮説】

□行程を確認する際に写真や具体的な場面を提示すれば、子供は「なりたい・在りたい姿」を具体的にイメージし、自分事としてこだわりをもちやすくなるのではないか。
□「それは誰のため？」「達成できたら誰がHAPPY？」と問い返せば、個人的な楽しさが、集団の一員としての役割や公共性を意識した考えへと広がるのではないか。
□実践したその日に、仲間同士で頑張りを認め合い、フィードバックする場を設ければ、学びの価値や自己の成長を自覚しやすくなるのではないか。
□共通点や相違点を可視化するワークシートや板書を用いれば、互いの考えの違いを生かして合意形成する対話の価値を実感できるのではないか。

北海道教育大学附属旭川小学校 教育研究大会2026 実践報告

算数　２年１組「何人いるかな」授業者　櫻井 里佳

数え方の違いを比較し、図と式を関連付けながら考えを深める算数科の学習

目指す子供の具体的な姿	
問いやこだわりをもって学ぶ子供の姿	「どうして 11 人になるのだろう」「この『１』は図のどこにあるのだろう」と、自分の考えとのずれや数え方の違いにこだわりながら、図・式・言葉を関連付けて、より分かりやすく表そうとする姿。
仲間と対話し、考えを広げ深めながら価値を共に創り出す姿	「同じ人を２回数えている」「ここが足りない」など、仲間の考えとの違いを比較しながら、図・式・言葉を行き来して考えを説明し合い、より妥当な考えを学級全体でつくり上げていく姿。
学びを通して自己を変容させ、自らの可能性を広げていく子供の姿（単元レベル）	「どこから数えるのか」「何を１人とみるのか」といった数え方の基準に着目しながら、図・式・言葉を関連付けて考えたり、仲間との違いを比較したりすることを通して、思考を深めること自体に価値を見いだし、算数を愉しもうとする姿。

【成果】

○【問いやこだわりをもって学びに向かう姿】

子供たちは、「どちらの式が正しいのか」「なぜ－１をする必要があるのか」といった問いをもち、自分なりの数え方や表し方にこだわって学習しました。答えを求めるだけでなく、自分の考えを図・式・言葉で表し、その理由を説明しようとする姿が見られました。

○【教科の見方・考え方と結び付いたこだわり】

「どこから数えるのか」「重なりをどのように捉えるのか」という順序数の見方に着目し、図・式・言葉を関連付けながら考えを見直す姿が見られました。

○【仲間との対話を通した再構成】

ペアや全体で友達の考え方に触れ、自分の図を書き直したり、重なりの意味を捉え直したりする姿が見られました。異なる表し方を比較することが、自分の説明をより根拠の明確なものへと再構成する契機になりました。

○【学びの価値と、それを支えた教師の関わり】

「図で表すと理由を説明しやすい」「友達の考えから新しい見方に気付いた」と、表現や対話の価値を見いだす姿が見られました。４月から図・式・言葉を関連付けてきたことや、教師が誤りをすぐに修正せず、子供の考えを価値付けながら問い返したことが、思考の過程を愉しむ姿につながりました。

【課題】

●【問いやこだわりの焦点化】

子供は自分なりの考えにこだわって学習しましたが、そのこだわりを教科の本質に迫る問いへと発展させるには、教師が問いを焦点化したり、子供同士で問いを共有したりする場をさらに工夫する必要があります。

●【共同体で価値を共創する対話】

対話を通して考えを書き直す姿は見られましたが、異なる考えを比較・統合し、新たな考え方や説明を共同で生み出すところまでは十分に表れませんでした。対話の目的や交流の場の設定を検討する必要があります。

●【学びの価値や自己変容の自覚】

考えることを愉しむ姿は見られたものの、自分の考えがどのように変わったか、仲間との学びによって何を得たかを振り返る姿は十分に見取れませんでした。自己の変容を自覚する振り返りを工夫する必要があります。

【次につながる仮説】

□複数の考え方が自然に生まれる課題を位置付け、その違いを比較する時間を十分に確保すれば、子供は問いやこだわりをもちながら思考の過程を愉しむのではないか。

□「なぜ－１になるのか」「その図は何を表すのか」と問い返せば、子供は数量や図・式・言葉を関連付け、算数の見方・考え方を働かせるのではないか。

□自分の図・式・言葉を基に説明し、互いの違いを比較する場を設ければ、仲間との対話を通して考えを再構成し、よりよい説明を共につくるのではないか。

□「考えがどう変わったか」「友達から何を学んだか」を振り返れば、学びの価値や自己の変容を自覚し、次の学びへ踏み出すのではないか。

北海道教育大学附属旭川小学校 教育研究大会2026 実践報告

社会　３年２組「わたしたちのまちと市」授業者　畑 千尋

自己の生活体験へのこだわりから問いを見いだし、考えを深めることを通して、これからのまちの価値を共創する学習

目指す子供の具体的な姿	
問いやこだわりをもって学ぶ子供の姿	自分の生活体験に基づいた「こだわり（大切にしたい価値観や、誰にどうしてほしいかという願い）」をもって調べた施設を、巨大な地図に位置付ける姿。さらに、完成した地図全体を俯瞰してシールの偏り（密集や点在）という事実に気付き、「なぜこの場所に集まっているのだろう？」と主体的に問いをもつ姿。その際、単なる想像で終わらせず、シールの下や周りにある「大きい道路」や「山の広がり」「住宅の多さ」といった地形や交通などの地図上の事実を確かな「証拠」として用い、施設と場所の結びつきに説得力のある理由を見いだして表現しようとする姿。
仲間と対話し、考えを広げ深めながら価値を共に創り出す姿	学級全体での対話において、自分の調べた施設の場所とその地理的条件や、願いを伝えるとともに、大通りや郊外、住宅街など、異なる場所の施設を調べた友達の意見に耳を傾け、比較・関連付ける姿。対話を通して、「大通りに施設が集まるのは交通の便利さを大切にしているから。」「住宅街にある歯医者さんは、近所の人々の安心な生活を支えたい。」と、場所の違いによる多様な価値観に気付く姿。そして、一人ひとりの「こだわり」を地図上でつなぎ合わせることで、旭川市のまちが人々の様々な「願い」と「地理的条件」が結びついて作られているという見方（学習問題の結論）を、新たな価値として共に創り出して共有していく姿。
学びを通して自己を変容させ、自らの可能性を広げていく子供の姿（単元レベル）	単元の導入では、まちの姿を「最初からそこにある当たり前のもの」として捉えていたが、学習を通して「まちは人々の多様な願いに合わせて姿を変え、作られてきた」という社会的な見方を獲得する姿。単元の終末には、「私ならこうするカード」の交流を通してその見方をさらに働かせ、これからの旭川市も「自分たちを含めた多様な人々の願いやこだわりが集まって、よりよいまちへと共創されていく」ことについて、自分なりの言葉で意味付けし表現できる姿。

【成果】

○【問い・こだわりをもって学びに向かう姿】

日頃よく利用する施設や家の近くの場所など、生活経験に基づいて調べる対象を選んだことで、子供が地域の事象を自分事として捉え、主体的に事実を集める姿が見られました。「家の近くにある」「周りは住宅地である」といった事実から、施設の位置と土地利用や人々の生活を関連付けようとする姿も見られました。

○【共有・対話を通した見方の広がり】

それぞれが調べた施設を一枚の大きな白地図に位置付けたことで、「駅前や大通りだけでなく、住宅地の中にも施設が分布している」という空間的な広がりに気付き、まちの全体像を俯瞰して捉えようとする姿が見られました。

○【学びの価値の見いだしと自己変容】

振り返りでは、地域の施設への関心を広げたり、「みんなが発表を頑張っていた」と友達と学ぶよさを見いだしたりする姿が見られました。生活経験を起点に対象を選び、大きな地図で事実を可視化したことが、個別の調査をまち全体の見方へ広げる支えになったと考えられます。

【課題】

●【こだわりと教科の見方・考え方との接続】

施設の選択理由が「好きだから」「よく行くから」という個人的な思いや紹介の楽しさにとどまり、施設の位置や分布を、交通、土地利用、人々の生活との関係から捉えるところへ、学級全体として十分に向かいきれなかった可能性があります。

●【対話による思考の見直し・再構成】

扱う施設が多岐にわたり、焦点化が難しかったため、交流が調べたことの紹介や事実の確認にとどまりました。共通点や相違点を比較し、友達の見方を取り入れて考えを再構成する対話にまで深まりにくかったと考えられます。

●【自己変容の自覚と教師のコーディネート】

「遠くから来る人」「近くに住む人」という視点は出されましたが、その違いを十分に検討できず、子供が「まちの見え方がどう変わったか」を自覚するまでには至りませんでした。「周りが住宅地だから」という核心に迫る発言を板書で構造化し、他の施設と比較・関連付ける教師の働きかけに改善の余地があります。

【次につながる仮説】

□施設の分布の特徴や理由を考える場面で、「駅前」と「住宅地」など比較しやすい対象に焦点化すれば、子供は場所による役割や利用する人々の違いに気付き、考えを再構成するのではないか。

□「周りが住宅地だから」という見方を他の施設にも当てはめ、「遠くから人が来る施設と何が違うか」と問い返せば、子供は事実を比較・関連付け、施設の位置や分布の意味を捉えるのではないか。

□単元の終末に、まちの地図の見え方や友達の考えによる自分の見方の変化を振り返れば、他者と学ぶ価値や自己の変容を自覚しやすくなるのではないか。

音楽　２年２組「はくやリズムとなかよし」授業者　山本 帆南

体から生まれる音をつないだリズムリレーを通して、音や仲間との対話から発想を広げる音楽科の学習

目指す子供の具体的な姿	
問いやこだわりをもって学ぶ子供の姿	体を使った音遊びに取り組む中で、「なぜこのリズムなのか」「もっとよくするためにはどうしたらよいか」といった問いをもち、自分（たち）の表現に合った音やリズムを選ぼうとするなど、音楽に対するこだわりをもって追究しようとする姿。
仲間と対話し、考えを広げ深めながら価値を共に創り出す姿	友達と一緒に表現したり、友達の演奏を聴いたりする中で、自分にはなかった表現方法や音の選び方に気付く姿。 また、友達の表現に対して「なぜ良いと思ったのか」を言葉にしたり、仲間から得た考えを自分の演奏に取り入れようとしたりするなど、対話を通して表現の価値を共に創り出そうとする姿。
学びを通して自己を変容させ、自らの可能性を広げていく子供の姿（単元レベル）	体を使った音遊びを積み重ねる中で、「こんなリズムもいい」「自分にもできそうだ」という新たな発想や自信をもち、より意欲的に表現しようとしたり、次の活動につなげたりする姿。

【成果】

○**【問いやこだわりをもって学びに向かう姿】**
自分でリズムを創ったり、オリジナルのカードに音を書き留めたりするなど、「自分の音」を形にすることへの強いこだわりが見られました。「こうつなげたら面白い」「何かが違う」と試行錯誤し、お気に入りの表現を見つけようとする姿も表れていました。

○**【教科の見方・考え方とのつながり】**
身の回りの音から「こうしたら面白くなる」という考えをもち、音色や響きに着目して構成を工夫しようとする姿が見られました。

○**【仲間との共有による発想の広がり】**
他のグループがタブレット端末や身体表現を使って音を出す様子に触れ、「あんな音の出し方もあるんだ」と、自分の発想を広げる姿が見られました。

○**【単元構成・教材・教師の関わり】**
顔写真入りのカードなど、一人一人が関わりやすい教材が「やってみたい」という意欲を支えました。また、教師が子供と「今日は何をしようか」とめあてを考えたことで、自分たちの学びとして活動に取り組む姿につながりました。

【課題】

●**【音楽的な探究への深まり】**
子供のこだわりがリズムの枠組みや物語に合わせた効果音作りに向かい、音色やリズムそのものの面白さを探る学びに十分つながらなかった可能性があります。

●**【記号が発想に与えた影響】**
リズムカードの記号や名称が先行し、具体的な音の響きを十分に味わう前に、子供の発想が固定化された可能性があります。

●**【対話を通した再構成】**
仲間との関わりが方法の紹介や活動の盛り上がりにとどまり、自分たちの音楽的な発想を見直したり、新たな表現を共につくったりする対話にまでは十分至りませんでした。

●**【学びの価値や自己変容の自覚】**
「面白かった」「またやりたい」という達成感は見られましたが、活動によって自分の感じ方や表現がどのように変わったかを振り返る場が十分ではありませんでした。

【次につながる仮説】

□身体表現や身近な物を使って音を十分に試す場を設ければ、子供はカードの記号に縛られず、音そのものの面白さに基づいたこだわりを発揮するのではないか。
□「なぜその音が気に入ったのか」と問い返せば、感覚的なこだわりが、音色・リズム・構成を意識した音楽的な発想へとつながるのではないか。
□活動で新たに気付いた音の特徴や面白さが、自分の感じ方や表現をどう変えたかを振り返れば、学びの価値や自己の変容を自覚しやすくなるのではないか。